

## 「芸術活動における互酬制の観察と実験」

～音楽作品の送り手と受け手の間の距離に着目して～

社会システム研究科 地域コミュニティ専攻 2011M30007 平尾一博

### 【論文要旨】

「互酬」とは、文化人類学、経済学、社会学などにおいて用いられる概念で、義務としての贈与関係や相互扶助関係を意味する。

人類学者のカール・ポランニーは、社会統合の主要なパターンのひとつとして互酬を位置づけ、非国家レベルにおける主要な経済形態とした。互酬は対称性を特徴とし、財やサービスの運動によってギブ・アンド・テイクを促進する。同じく人類学者であるマーシャル・サーリンズは、近親者に多い「一般化された互酬」、等価交換である「均衡のとれた互酬」、敵対関係に多い「否定的な互酬」に分類して分析を加えた。

当研究の目的は、音楽（器楽曲・声楽曲、生演奏・録音演奏など）を演奏する立場と、それを享受する立場。その二つの立場の「距離」を測ることにより、そこに取引されている「モノ」と、それにこめられた意味を明らかにすることである。

筆者のこれまでの音楽活動、マスメディア上での商業・学術音楽の観察、音楽療法のあり方などからの推察すると、演奏者と観客の距離が音楽ビジネスにおいて重要な要因として機能しているように思われた。

実はその距離感は演奏者や観客よりも、その会場や店舗、団体を管理・運営している人々によって醸し出されているように思われる。その距離感の演出を観客は漠然と感じ取りながら、自らの求める音楽の場を探して移動しているのではないか。

人間の欲求にはいくつかの段階があり、運営者、演奏者や観客が求める「モノ」や「距離」はそれぞれ異なる。その欲求が満たされているかどうか。なぜ満たされていると思えるのか。満たされていないなら、何が足りないのか。

音楽にさまざまなかたちで関わる人々にとって、欲求不満はコンプレックスとして鬱積し、ある種の行動表現となる。そこでは不満の類型や重さ、深さが「距離」を伴って表出する。また現状に満たされていても、その次の「モノ」を求めるのならば、それも何らかの行動となって表れる。

精神科医のマイケル・バリントは、発達論的対象関係論の見地から、母子一对の「調和的渾然体」が敗れた時に二つの状態が現れると指摘した。一つは、安全保障感を「距離」に依存する「フィロバティズム」であり、もう一つは、安全保障感を接触に依存する「オクノフィリア」である。

同じく精神科医の土居健郎の提唱した概念「甘え」に即して言うなら、「調和的渾然体」が原初的な「甘え」の状態であり、フィロバティズムは「甘えの拒否」、オクノフィリアは「甘えの病理的形態」ということになるだろう。

これが成人において現れれば、フィロバティズムの場合、対象なき空間とおのれの「スキル」とに全幅の信頼をおいて飛躍する「スリルの人」となる。対象はスキルを発揮するための道具にしかすぎず、いくらでも取り換えの利くものである。これに対してオクノフ

イリアとは、対象なき空間を恐怖し対象にしがみつくとを好む臆病な人、独りでおれない人である。

いくつかの先行研究にあたってみたのだが、第三者としての観察が多かった。今回は実際の曲作りとライブ活動による、ある種の実験データも含めて考察してみた。

観察と実験方法の具体例としては、実際に音楽活動が行われている現場（ライブ会場、ネット配信）での観察によって、取引されている商品の種類、取引方法、金額などのデータを収集した。また、経営者や作曲家、演奏家、観客等へのインタビューを通じて、それぞれの音楽作品や音楽活動への関わり方をうかがった。

観察と実験の結果を考察しながら、音楽は音楽のみでは存在しえないことに気付いた。ならば、音楽そのものを取引することもできないはずだ。では、我々はいったい何を取引しているのか。音楽の周辺に存在する何か（モノ）を取引していると考えざるを得ない。

音楽の周辺に存在するモノを取引するためには、当然ながらそれらの取引の場（レコード店、ライブハウス、あるいはストリート、インターネット空間、握手会場など）に赴かねばならない。そして、それがどのような場であっても、明文化の有無に関わらず、そこには「ルール」が存在する。そのルールの下で人々が感じる（あるいは演じる）ある種の雰囲気「距離」である。

考察を経て、音楽ビジネスにおいて取引されているモノ。それは、ある「ルール」の下で「(音楽の) 送り手」と「(音楽の) 受け手」とが演じる相互行為そのものである、という結論に達した。つまり、音楽ビジネスにおける「距離」とは、取引されている「モノ」そのものであり、そこにこめられた「意味」を支えるのも、また「距離」なのだ。

残された課題、問題点として、本来は音楽を通じて取引される「モノ」の正体と、それを演出する「ヒト」の欲望をデータを通じて定数的に明らかにしたかったのだが、限られたデータと歴史的、共時的考察による質的研究になってしまったことが挙げられる。

その点についても、定数的データを比較的に手に入れやすいインターネット配信などの世界で音楽家が多数生まれてきている状況を考えるなら、今後の研究継続で定数的な指摘も可能であると考えられる。